

## 経営を圧迫する病気 その3 腸炎のお話

(有)シェパード 獣医師 松本大策

みなさんこんにちは。(有)シェパードの獣医師 松本です。突然ですが、みなさんの胃腸は丈夫ですか？腸というのは胃袋からつながる消化器官で、食べ物の消化と、栄養や水分の吸収をする、というのはみなさんご存じですね。でも腸管には、他にも大切な働きがいくつかあるんです。一つは、特に牛さんでは重要な、「カロチンをビタミンAに変換する」という働き、もう一つは、「免疫のコントロール」という、動物が生きていくのに欠かせない大切な働きです。ラストサムライで主役だった渡辺謙さんが、ヤクルトのコマーシャルにでてるでしょ？「生きるための力」とか言って。あの人は、白血病を克服して役者さんに返り咲いた人なんです。白血病とかガンとかも、「免疫」の働きと深い関係があります。免疫を強化してガンや白血病を克服しようという療法が注目されているのです。だから、渡辺謙さんは、免疫をコントロールする腸の健康を守るヤクルトのコマーシャルに打ってつけたわけですね。(ヤクルトさん、なんかちょうだい)

少し長くなりましたが、腸管の健康の維持が重要だということがお解りいただけたと思います。というわけで、今回は腸管がダメージを受ける病気、「腸炎」についてお話ししましょう。

腸炎の種類もいろいろありますが、原因別に分けると大きく「寄生虫性の腸炎」、「ウイルス性の腸炎」、「細菌性の腸炎」、「代謝性の腸炎」に分けることができます。寄生虫性腸炎については、第17回の「寄生虫のお話し」でお話ししましたので、そちらを読んで下さい。寄生虫の駆除は、肥育農場の最低限の予防衛生です。ここをしっかりとっておくと、線虫やコクシジウムの下痢が出なくなります。

「ウイルス性の下痢」はいろいろあるのですが、子牛ではロタウイルス、コロナウイルス、などのウイルスによって下痢が多発する場合があります。肥育牛では、牛粘膜・下痢病(BVD - MD)ウイルスやアデノ7型ウイルスによって下痢が発生します。どちらも肺炎を起こすウイルスとしてよく知られているのですが、アデノ7型ウイルスは血便の原因になる場合もあります。ウイルスを殺せる薬は、まだありません。(よく知られている抗生物質は、細菌とマイコプラズマにしか効かないのです) ですから、これらの下痢が多発するようでしたら、ワクチンを接種する、免疫を高める処置をする、などの対策を打ちます。ワクチンというのも、特定の病原体に対する免疫を高めるための注射です。ワクチンは肺炎用の5種混合ワクチンが生ワクチン、不活化ワクチンともに発売されています。それぞれ長所と短所があるので獣医さんに相談してみてください。免疫を上げるには、いくつか方法があります。まず駆虫。これで免疫活性が上がることも多いのです。



それからビタミンEやビタミンA、亜鉛などの給与も免疫向上に効果があります。とくに肥育牛でビタミンAや亜鉛が不足していると、下痢や血便が多発するので注意して下さい。それからトルラミンなどの酵母製剤や人間のヤクルトと同じような生菌剤も免疫を向上させてくれます。僕は、コンサル先には必ずアースジェネターやビタコーゲン、ピオスリーなどの生菌剤を使ってもらっています。効果から考えたら安いものです。乳酸菌だけの生菌剤を使う場合には、納豆菌の製剤と併用すると、より効果的です。さらに、急いで免疫を上げたい場合などは、万田酵素というものも使う場合があります。これは、いろいろな植物の生理活性物質を抽出して酵母発酵させたもので、免疫の改善にはとても効果が高いのです。

さて、お次が「細菌性の下痢」ですね。このタイプの治療には、ちょっと注意が必要です。みなさん、下痢のときには下痢止めを使いたくなりますよね？ベルベリンという成分の入った黄色い薬です。でも、細菌性の下痢の場合、むやみに下痢を止めると、恐ろしいことが起こる場合があります。どうしてかお話ししましょう。下痢はなぜ起こるか？というと、「腸の中の毒素を早く排出したいから」なのです。細菌性の下痢では、腸内の悪玉菌が毒素を出すことが多いのですが、下痢を無理に止めると毒素が身体にたまって悪影響を及ぼすことが多いのです。むかし、O157で死ぬ人がけっこう多かったでしょ？あれは、まだO157が知られていなくて、お医者さんが下痢止めを使っちゃったために、ペロ毒素というO157の毒素が排泄されずに腎障害を起こしたためなのです。ですから細菌ではO157に下痢止めは使いません。下痢で毒素や細菌を排泄させながら、細菌を殺す薬(抗生物質)でO157をやっつけるのです。だから最近O157で死ぬ人はほとんどいません。牛さんもおなじことです。細菌性の下痢のときには、下痢を止めずに原因細菌を殺菌していった方が安全なのです。

「代謝性の下痢」というのは、生きるための身体の仕組みがうまく働かなくなって起こる下痢のことで、肥育牛では、ルーメンアシドーシス(第一胃の胃酸過多)でエンドトキシンが多量に発生した場合やそれに引き続いて起こる代謝性肝炎で起こることが多いです。他にも死亡壊死症の場合やタンパク質が第四胃でうまく消化されない場合に大腸で腐敗発酵して起こる場合にも下痢が見られます。注意しなければならないのは、尿石症の末期、特に膀胱破裂のときなどに「尿毒症から起こる下痢がある」ということです。尿石症を見落とすと、枝肉が全部廃棄になってしまいますから、この下痢だけは素早く正確な診断が必要になります。代謝性腸炎の診断は難しいので、食欲が落ちる下痢が発生したら、獣医さんに見てもらいましょう。手遅れになるととんでもない被害を及ぼすことがありますからね。

